

工兵第二七連隊（極部隊） 南部粵漢線撤退戦

千葉県 林 正作

私は現在の大綱、元松穂村南横川の農家に生まれ、長男ではありませんが姉六人、弟一人でしたので姉に婿を取り私は林家を継ぐことになりました。

田舎の棟梁のもとへ大工の弟子入りをしました。東京麴町の大工だった養父は東京築地工手学校四期生（工学院の前身）でしたので、私は本郷金助町（御茶ノ水と湯島の間）の横川電気の研究所の職員になり、三鷹の現場監督をやっておりました。横川の工場から夜間工學院の建築科に入って勉強しておりました。

生まれは大正十年十二月二十日生まれです。十年生まれは本来昭和十六年徴集ですが、十年でも十二月だったので、十七年徴集兵として昭和十八年一月十日、東京赤羽の工兵隊に、北支要員として入営しました。

二十日ほど後の一月三十日東京を出発し、朝鮮經由で北支の天津に着いたのは二月三日でした。

天津の支那駐屯の第二十七師団で初年兵教育を受け、六月に一期の検閲を受けましたが常にトップでした。

体は大きく体力はあり、何をやってもだれにも負けないので軍隊が面白くて仕方がない。そのため成績が良いせいか一選抜で上等兵に進みました。すると、中隊で私一人だけが人事係や中隊長殿からも呼ばれ、下士官志願をするようにと申されました。私は長男で、しかも林家を継がなければならないのでお断りをしました。しかし断り切れず、無理矢理に下士官候補者の学校へ入校となりましたので、昭和十八年十二月一日、満州チチハルの学校で、十九年三月三十日までの間、厳しい教育を受けました。

満州の冬です。厳寒の最中、一面は雪でした。昼は目一杯演習、夜は敷布を頭から被り、狼に対するため銃に弾丸を五発装填して夜間戦闘演習です。昼の演習の内容は工兵としての爆薬操作、操舟、架橋、ロープの結び方などです。爆発演習は随分やらされました。

二〇〇グラムの四角い黄色火薬です。

三月一杯で連隊復帰命令が出ました。もう河南作戦は発起になり、部隊は黄河北岸霸王城の反対側におり、霸王城攻略作戦は終わっていました。復帰の報告をしますと、中隊長は現役のバリバリ下士官が帰って来たと、大変喜んでくれました。

第四小隊第四分隊長を命ぜられ作戦に参加しました。作戦は行軍の連続ですので、行軍に着いて行けない兵隊がいる。私も分隊長でありますので二人分の装具を背負って歩きました。部隊に着いて行けず落伍すれば捕虜になってしまうから自殺する兵隊も出るのです。

私の部下の二人の兵隊は自殺してしまいました。落伍する兵隊の銃や背囊を持ってやりました。すると「銃は自分が持ちます」というので、背囊だけ私が背負って行軍しました。まさか自殺するとは思いませんでしたが、渡した銃を口に銜え、足の指で引き金を押して発砲自殺してしまつたのです。

もう歩けない、置いていかれると捕虜になる。それなら死のうと、精神的にも肉体的にも弱つていてつら

かつたのだらうと思ひました。落伍させないために二人の銃と背囊を背負つて行軍していた私にとつては、耐えられぬ気持ちでした。「まさかあの銃で、それなら渡さなければ」と。

小指一本だけを短剣で切り、死体は穴を掘つて埋め、宿営のとき、小指を焼いて遺骨としました。自殺した二人とも補充兵でした。現役兵は若いし体力もあり、初年兵の時は徹底的に鍛えられるから大丈夫でした。補充兵は年配で召集された人が多いから、初年兵の時の鍛えられ方が違ひました。

工兵は歩兵と違つて戦死者は少なかつたが、毎日行軍ですから食料の後送はなく、現地調達のみなので栄養失調になる者が多いのです。病氣や体力の弱つた者は野戦病院へ置いて行くのですが、野戦病院では、負傷やけがにはヨードチンキ、下痢にはクレオソートしかなひ。戦友をそこに置いて行くときは、当然死ぬのは分かつていたのでかわいそうで仕方がないのでした。作戦で工兵は歩兵と一緒にというより、渡河や架橋などのときは歩兵より前に行かねばならないから、患者

は置いて行くより仕方ない。連れて行けば足手まといになる。工兵は架橋するときは船を集め、その上に板を渡して船橋を作る。架橋材料があればいいが現地調達より他はない。船は調達しても板がなければ渡せない。

山砲隊を渡すときは、馬と砲なので相当しつかりした五く六トンの船を徴発する。戦闘中になると部落民は逃げてしまっていないので、畔に繋いである船を持つて行く。橋が出来れば師団全部を渡し、終わると一番の前線までに行くために駆け足で走らなければなりません。一個中隊で架橋とか渡河をすると、他の中隊が歩兵と一緒に前に出て行く。反対に撤退の時には最後まで残って橋梁を破壊してから撤退しなければなりません。

我が第二十七師団（極兵団）は北支から中支へ、河南作戦（京漢作戦）から、十九年夏からは中支で湘桂作戦と歩きながら南下したのです。第十一軍主力は衡陽―全県―桂林―柳州と進撃して、在支米航空基地

を占領していきました。

我が師団は、南部粵漢線を打通するため、昭和二十一年一月ころから更に南下して行きました。南支には遂川とか贛州の航空基地攻略作戦を開始したのが一月中旬でした。この作戦は中支と南支から同時に開始され、中支からは我が第二十七師団と第四十師団（鯨兵団）、南支軍からは第四百師団（鳳兵団）の三個師団が主幹となつての戦闘だったといいますが、そのとき、我々はそのような作戦とは知らず、空襲の中をただただ歩け歩くと、戦闘と行軍の連続でした。

広東の二十里（八十キロ）手前まで南下したら、第六方面軍命令で、揚子江沿岸へ北上せよとのことでした。我々は急遽、昼夜をついで行動しました。昼間は空襲でやられる。主要道路は切断され鋸の歯のように切り取られているので皆畦道を歩くより仕方ありません。膝から下はいつも泥んこ。夜行軍だから皆眠りながら歩く。前の人と紐で結んで、その紐を自分の手に結んで歩く。そうでないと置いていかれてしまいます。その時は撤退だから最後尾は歩兵が守る。「極兵団」

を全滅させると蒋介石軍が追撃してくる。工兵隊は撤退のときは橋架けもなかった。しかし、兵隊は昼夜ぶつ通しですから消耗していききました。

揚子江まで着かぬうち、あらゆる兵科の兵隊が消耗しましたので、船を一二〇隻集めそれに乗せ、工兵一個分隊（私が分隊長）を先頭にして進みました。小隊長は昔の一年志願の年配将校で、私は十五人の部下を指揮していました。病人や弱兵を全部船に乗せ、私は先頭の船で出発しましたが、左岸は友軍、右岸は敵でした。夕方になり右から敵襲を受けたので船を左岸へ着けました。船の敵側に土のうを積んで、重機関銃一個大隊と山砲一門が船団を護衛するため、重機関銃大隊長が来られました。

船は夜間を利用して出発しました。山砲と重機関銃が援護射撃をしたら敵から猛烈なおつり（反撃）がきました。闇夜に鉄砲といいますが、船が右側に近付くと曳光弾で撃たれる。船は流れにまかせて下るだけです。曳光弾は心理的にも恐ろしく感じるので、補充兵が舵を放してしまったので、左からも弾がくるのは船が川

の中を回っているためでした。私は急いで舵を取って船を直しました。敵の重機関銃は撃ってくるが闇夜に鉄砲だったので被害は少なかったのです。

結果的には船を左岸に着けたら中洲でした。小隊長が飛び降りてしまったので、兵隊に銃と弾薬と米だけを持たせて中洲へ降りました。民家へ入り飯を炊かせ、一番高い所へ登り戦闘体形を取ったら夜が明け、そのうちに重機関銃の隊長が登って来て、銃を据え銃撃戦となりました。

船を中洲から左岸に着けました。昼の十時ころ小隊長が敵に撃たれながら帰って来ました。幸いにも被害はありませんでした。その後、我々は機関銃大隊と交代して山を降りましたが、背囊を置き放しなので夜になつてから、友軍側の船縁につかまり流れに従って川を下りました。敵が撃つてこなかったので着岸して部下に背囊を渡し船を放棄しました。

他の部隊で船のまま下つたら、敵は役に重機関銃を据えて撃つてきて船は乗つ取られてしまいました。あの時は「これでもう終わりか」と思いましたが、兵十

五人を連れていたので殺してはならないと思いましたが、船を降りてやっと本隊と合流できました。

それで揚子江沿岸に近付き、あと一日の工程でという時、終戦となり小隊長代理をやつて九江付近に到着しました。敗戦を知ったのは八月十七日ころだと思えます。小銃の菊の紋章を鑢で削ったのです。そのとき師団全部が合流したのだと思います。揚子江で大船を徴発し、常州と無錫へ行くことになりました。師団司令部は無錫、工兵隊は常州です。

集結は日本人経営の紡績工場で、コンクリートの床に南京袋を何枚も敷いて寝たのです。作戦間は携帯天幕一枚だけでした。二カ月後に武装解除になりましたので、兵器を庭に並べました。その時の中国軍参謀将校は我々の橋本工兵連隊長の士官学校の教え子でした。そのためか、随分よくしてもらいましたので、食料も食べ切れないほどもらいました。

しかし、上海の汽車に乗ると、機関士や駅員たちから、米も砂糖も取られた。渡さねば汽車が止まってしまふというので、乗船まで苦労しました。

昭和二十一年三月二十三日、上海を六千トン級のLSTに乗って出港したのですが、台風の中に入ってしまった、皆飯も食べぬほど酔ったのですが、私だけは元気でした。博多に着いて、北海道へ帰る者に乾パンをあるだけ分けてあげ、私は三百円と切符をもらい、博多―東京―大網の駅にやつと着きました。

近所の戦友と荷物を担いで海岸まで行ったら軽トラツクが通り、その荷台に乗せてもらい、家まで帰ることができました。帰ってから、マリアで四十五日間、毎日医者が見に来てくれましたが、高熱と悪寒で悩みました。幸いに近所の兵隊がマリアの特効薬をくれました。助かりました。

治まってからは病氣も癒え、赤貝船や担ぎ屋をして、土地改良事務所に十年間、その時、工兵隊へ行つたお陰で土木をやり四〇〇町歩を改良することができました。

【解説】

工兵第二十七連隊（極二九〇七）の部隊略歴は次のごとくである。

昭和十一年四月五日、軍令甲第五号に依り支那駐屯軍編制下令、工兵第十六大隊第一中隊を以つて支那駐屯工兵隊編制、部隊編制は本部、一中隊で河北省天津に駐屯し同地付近の警備並びに居留民の保護に任ず（これが同連隊の起源である）。

昭和十三年六月二十一日、軍令陸甲第三四号に依り工兵第二十七連隊編制下令、支那駐屯工兵隊を以つて本部、第一中隊を、工兵第十一連隊の一中隊を以て第二中隊を編制し、南京に於いて編制完結す。

初代連隊長 陸軍工兵中佐小川三郎

十三年六月二十一日、第二十七師団編制隷下に入る。
十三年七月二十八日～十二月九日、武漢作戦に参加。
十三年十二月十日～一八年八月十日、天津付近の警備。

昭和十四年二月二十日～三月九日、英租界封鎖に依り英租界周辺の鉄条網の構築並びに日本租界、伊太

利租界間白河の木橋の架設作業を実施。

同六月二十二日～九月十日、潞安作戦に参加。

同七月十七日～十月二十日、河北省天津付近未曾有

の大洪水に際し築堤構築排水作業等に従事す。

昭和十六年四月十一日～七月二十日、中原会戦に参加。

同五月十五日～八月二十日、冀東省肅正作戦に参加。

同八月二十八日～九月九日、青納作戦。

同十二月八日、大東亜戦争勃発。

同十二月八日～一七年三月十七日、開鑿炭鉱の警備。

同五月十六日～十一月九日、湘贛作戦参加。

昭和十八年六月一日、軍令陸甲第三六号に依り編制下令。

同六月十五日、独立混成第六旅団工兵隊を基幹とし

て第三中隊を編制。

同六月二十六日、編制完結。

同八月十日、満州国奉天営口に移駐す。

同八月十一日～十九年三月十日、営口付近の警備。

昭和十九年三月十日、動員下令。

同三月十一日～五月十一日、京漢作戦に参加。

同五月十二日～八月八日、湘桂作戦に参加。

同八月九日～十月三十一日、東部衡陽道掃討作戦に参加。

同十一月一日～二十年一月九日、茶陵来陽付近の警備

昭和二十年一月十日～二月二十八日、遂贛地区攻略作

戦に参加（南部粵漢作戦）。

同三月一日～五月三日、贛州付近警備。

同五月四日～七月五日、三南作戦に参加。

同七月六日～八月十七日、江西作戦に参加。

同八月十七日、十四日付停戦の大詔を拝す。

同九月十六日、常州地区に兵力集結。

昭和二十一年三月七日、上海集結。

同三月十八日、上海出航。

同三月二十三日、博多港上陸、復員完結。

師団は支那事変勃発以来、主として北支に続いて、満州に、更に一号作戦（京漢・湘桂・南部粵漢作戦）

発起のため北・中・南支と、中国大陸で戦闘に終始した極兵団である。

兵科で最も酷なのは工兵であると言われるが、聴取証言者の林氏の苦勞は察せられる。南部粵漢作戦は四国の第四十師団（鯨）と共にその任務を遂行したのである。

わが軍隊生活と湘桂作戦

新潟県 白倉 丘

——出征当時の家族の構成状況などをお聞かせください——

私は大正十年二月十七日、新潟県中蒲原郡大字二本木に生まれました。父は県庁の職員で、母は専業主婦でした。祖父と祖母はわずかでしたが、畑作に従事していました。その後、妹が生まれました。

父の給料を主とした生活ですので貧しかったと言った方が早かったです。しかし、周囲が農家でしかも農村の窮乏時代でしたので、家が貧乏だったという自覚はあまりなく、逆に周囲から恵まれていると見ら